

この章のまとめ

- 高校で習うaの代表には、「ある」、「どれでも (any)」、「～につき (per)」、「同じ (same)」の意味になるものや、「a + 固有名詞」で使うものなどがある。
- これらは、バラバラに見えるが、もともとのaのもつ雰囲気、すなわち、「1つ」→「リンクク」、「同じ種類のモノがいくつもあるうちの1つ」が隠れている。
- aの使い方には、このように、「狭義のa」とでも呼ぶべきものと、もう1つ「広義のa」とでも呼ぶべき用法がある。
- aはorganization (組織) やpush (押すこと) など、常識で考えると数えられないように思われる名詞や、few (いくつかの) のような「複数」の意味を含む語に使うことができる。
- たとえ目には見えなくても、「始めと終わりのあるもの」、「ワンパッケージをイメージさせるもの」にはaを使う。summerのような時間、dozenのような複数のモノのひとまとまり、症状のワンパッケージとしての風邪 (cold) など。
- chicken や democracy のように、aのあるなしによって意味が変わるモノもある。
- moom (ふだんはtheを付ける) やrain (不可算名詞) など、形容詞を付けて「種類」を表す場合、aを付ける名詞もある。

theの使い方が難しいので、ふだんはあまり意識しませんが、aもさりげなく難しいのです。なにしろ、使われる場面によって、「1つ」の意味が強く出たり、あるいは、ほとんど消えてしまったりするので。ここでいう「使われる場面」こそがコンテキスト (文脈) になります。これは冠詞を使うときにとっても重要です。Part 2でくわしく検討します。その前に「ゼロ冠詞 (無冠詞)」についてお話ししておきましょう。

第4章 ゼロ冠詞

(1) ゼロ冠詞を使う場面は？—— ゼロ冠詞の基本的な考え方

初めに文法的な確認をしておきましょう。

I bought a book. — この文では、bookにaを付けます。この場合のbookは、初めて話題に出てきたモノで、相手にはどの本かわかっていないから、aを付けます。

逆に言えば、aは後ろにくるのが、可算名詞の単数形であることを示唆します。つまり、相手の頭の中に、次にくる未知の名詞 (まだ話題に出てきていない名詞) のリンククを描く準備をするのが、aの役割です。

bookが、booksと複数形になると、aは付きません。bookが複数になることで、aのもつ「リンクク」のイメージがなくなるからです。

ゼロ冠詞 (無冠詞) を使うのは、「相手にはどの本かわかっていない、相手との了解が成立していない (=不定)」場面で、かつ、後ろにくるのは、aを付けない (リンククをもたない) 名詞の場合です。

リンククをもたない名詞とは、booksのような可算名詞 (数えられる名詞) の複数形、あるいはwaterのような不可算名詞 (数えられない名詞) です。可算と不可算の違いとは、おおまかに言ってしまうえば、モノがカタチをもつか、もたないかの違いになります。

不可算名詞には、細かく分ければ次のようなものがあります。